

柿の木の若返りによる生産性向上

要約

現在、柿の品種で最も多く栽培されている「富有柿」は、古くに植えられたものが多く、樹齢40年を超えるものが全体の約6割を占めている。老木化が進むと、生産される果実が小さくなり、量も少なくなる。そこで、植えてからすぐに果実をたくさん収穫できる大苗を利用して、老木から若木への植え替えを進めている。

現状(背景)と課題

- 県の柿栽培面積 1870ha の内、834ha が富有柿
- 富有柿は51年生以上34%、41~50年生27%
- 老木を若木に植え替えると、
2L(200g以上)の果実が 48% → 73%
収穫できる量が 1.4 t/10a → 2.0 t/10a
- 生産者によって改植後の生育差がみられる。

目標

- 2年生以上の大苗を育成する組織を6組織育成する。
- 平成26年度に富有柿の老木を若木に7.4ha 植え替える。
- 生育差となる要因を把握し、生育の改善にむけ指導する。

活動内容

- 生産者に対して、老木化した富有柿の植え替えの必要性を説明。
- 柿を生産している認定農業者や農協の柿部会員に対して、植え替えに活用できる補助があることを広報。
- H24年度より、大苗の育成について農業研究開発センターとともに巡回指導。
- H26年度には、改植後の栽培管理・生育状況の調査および巡回指導。

成果

- 大苗を生産するグループの5組織は、翌年に向けて2,370本の育苗がスタート。
- 老木から若木への植え替えは、補助事業を活用し282a実施。
- 生育差は、苗の品質より改植後のかん水、剪定、摘心などの栽培管理による影響が大きいことが要因であることがわかり、改善するよう栽培指導を行った。



大苗の巡回調査



大苗利用により若返った柿園

普及活動のポイント

- ・生産者ごとに、老木から若木への植え替え計画に応じて、補助事業の有効な活用方法をアドバイスした。
- ・大苗を生産するグループに対して、苗の育成から販売までを継続的に実施できるように、組織としての経営管理を指導した。
- ・大苗での改植後の栽培指導を徹底した。

対象の変化

- ・数力所に所有している老木化した園地を、順次計画的に若木に植え替えを開始した。
- ・自分たちで大苗を育成するグループが複数できあがり産地に大苗を継続し供給されている。
- ・継続して補助事業を活用している生産者が多い。

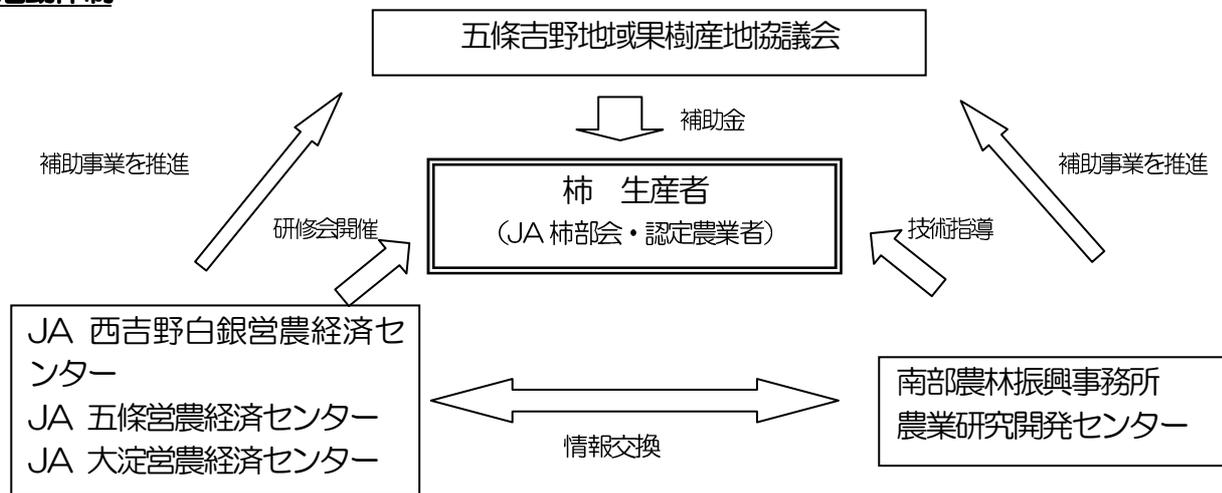
対象者からのコメント

- ・老木を植え替えたいと思っていたがなかなか出来なかった。補助事業がきっかけとなって、若木への植え替えを実施できるようになった。
- ・2年生以上の苗の育成を開始するには、これまでとは違う経費がかかるので補助事業があることで開始することができた。

これからの活動ビジョン

- ・大苗を育成する複数の組織が地域に定着しつつある。引き続き、富有柿の若返りを推進するとともに、優良系統「上平早生（仮称）」の導入にも活用を図っていきたい。大苗育苗及び大苗による改植を行った組織・農家に対して栽培管理等の指導を継続し行っていく。

活動体制



用語解説

○大苗

通常は、前年に実生苗に接ぎ木した苗を植えるが、もう1年育成して大きくした苗を「大苗」と呼んでいる。大苗にすることで、圃場に植え付けてから果実を収穫するまでの期間が短縮されるので有利である。